

汽車は急行だから、可成早く走つてゐる。

鐵の棒が昇降口の兩脇にあるだらう。

あれを俺は掴んで見た。冷い。

朝の四時か五時頃だつたからまだまつくらだ。

刑事も驛員も危険なので、誰も俺の居る傍へは寄り付かないのだ。

バスケットを投げた、あの時既に音がしたので、俺が飛んだと思つたらしかつた。

勿怪の幸だ。

俺は靜かに觀音を念じて、兩方の手で、鐵の棒を握り、意を決してブラ下つた。

爪先がスレ／＼に枕木に擦れる。

足を踏めて、兩手で體を支えてゐるのだ。

まごまごしては不可ない。

手を放し損なつて、鼻や目を打つ潰しては拙ひ、俺は呼吸を凝らした。

ダダダダ、ダと氣合を掛けた。